

講演 2

「WTO 加盟後の中国における農産物貿易の現状と問題点」

中国人民大学

農業と農村発展学院長 教授 唐

忠 氏

皆さん、こんにちは。今回、中村学園大学にお招きをいただきまして、テーマにある問題についてお話をさせていただくことについて、非常に光栄に思っております。

私は、中国人民大学の唐忠といいます。今回の発表は、私の同僚でもあります王志剛先生と一緒に準備してきました。王先生です。

今日は、3つの問題についてお話をさせていただきます。

1点目は、中国全体の経済と貿易の発展について見ていきます。2点目は、中国農産物貿易に関する発展の特徴について、お話をさせていただきます。3点目は、中国が直面する問題、あるいはチャレンジについて、お話をさせていただきます。最後に、もし少し時間が残っていれば、また皆さんから、ぜひ質問やご意見を頂戴したいと思っております。

1点目に入らせていただきます。中国全体の経済と貿易の発展についてお話いたします。

一言で簡単に申し上げますと、今まで世界では前例がなく、13億人の人口を抱える大国が20年も続いた高度成長、あるいは急速な成長をしたということですので申し上げたいと思います。

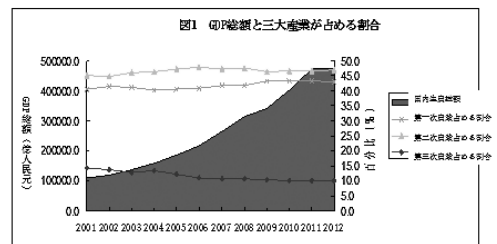
まず、イギリスの成長を考えてみたいと思います。イギリスは、100年以上前のビクトリア時代は4千万人の人口しかありませんでした。アメリカについても前の世紀の1950年代から成長し始めたと思いますが、その当ても2億人の人口しかありませんでした。日本も、前の世紀の1950年代から戦後の回復をして経済成長をしたのですが、その当ても1億人弱の人口しかありませんでした。

今現在、中国では13億人の人口を抱えていますので、その13億人の経済体の成長を見えるということは、実は今までの歴史の中ではないことです。

もう一つ言いますと、アメリカの現在の人口は3億人、日本は1.2億人、ドイツは0.8億人です。合わせても、およそ5億人ということです。もし中国の一人当たりの収入を、こういった先進国と同じようなレベルに発展したというのであれば、中国経済体の全体の経済規模はどれくらいなるかというのは、想像できると思います。

次に、一つのデータを見ていきたいと思います。

中国の国民経済と貿易の発展



資料：中経ネット統計データベース

5

まず、赤の部分になりますが、GDPの成長について見て取れると思います。それから、3つの線を表しているのが、第1次産業から第3次産業までの、全体に占める割合です。

GDPは、2001年の時点では、人民元でおよそ10兆元です。2006年を見ますと、20兆元になりました。2010年では、さらに1倍増やしまし

て40兆元になっています。去年の最新のデータを見ますと、51.9兆元となっています。

アメリカのGDPの計算では、今現在では15兆ドルとなっています。中国は、同じドルで計算すると、8.5兆ドルになります。日本は、約6兆ドルになります。

もう一つ、一人当たりのGDPの変化についてお話ししたいと思います。

2005年の、中国の一人当たりのGDPは、1,900ドルしかありませんでした。2010年のデータで言うと、4,480ドルになっています。去年の最新のデータでは、6,200ドルになっています。ですので、成長の速さが、はっきり見て取れます。

中国経済の発展のもう一つの特徴は、都市化の急速な発展です。都市化ということは、その都市部に人口が集中するということです。逆に言うと、農村の人口が少しずつ減っているということです。

1番目の特徴は、農村部における、熟練労働力の減少です。2番目の特徴は、農村における農民の兼営という傾向が強くなっています。3番目の特徴は、いわゆる出稼ぎ収入と農村での営農収入との格差が非常に拡大しております。農村の住民の収入における農業への依存がどんどん弱くなっています。

れに占める割合です。農業に関しましては、約10%です。これは生産高というもので見ます。従業員の占める割合を見ると31%です。この2つの数字を見れば、非常に格差が大きいです。

逆にどういうことかということ、31%の人が得る収入は10%です。ですので、想像できるように、農民の収入は非常に問題があり、低いということです。

もう一つの変化は、2011年から第3次産業の従業員数は、第2次産業より多くなったことです。昨年では1%多くなっています。

ただし、生産高から見て第2次産業は第3次産業と比べると、1%多いということです。

この従業員の数と産業の生産高を占める割合から見れば、逆転しているところが見て取れると思います。だから、これは中国の経済成長の中で構造的な問題です。

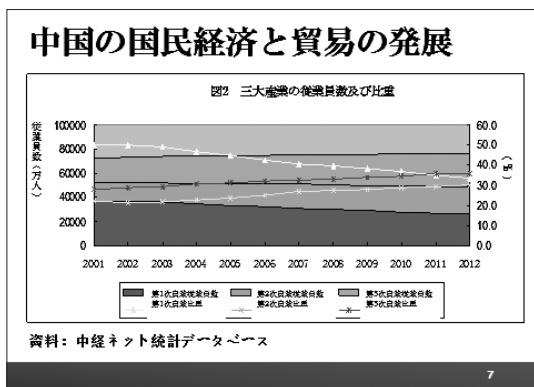
次に、貿易に関するデータを見ていきたいと思っています。

中国の経済は、貿易に依存する度合いは非常に高かったです。貿易の中で輸出と輸入を合わせて見てみると、GDPの60%ぐらいを占めています。最近は、少しずつ下降になっています。

例えば、データで、中国の2012年の輸出金額を見ますと、およそ2兆米ドルになっています。GDP全体は8.5兆ドルですので、基本的にはこのGDPの20%を占めています。

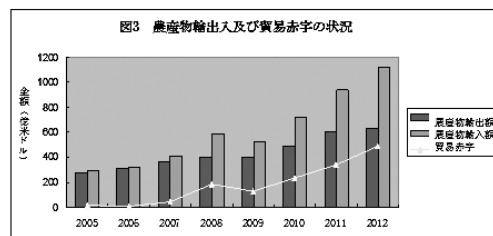
全体で見ると、中国の輸入は輸出より若干低く、輸入の全体の金額は1.8兆ドルとなっていますので、中国外貨の準備高は、昨年時点では3.3兆ドルに達しています。

農産物の市場から見れば、中国の農産物の関税は低く、開放度も高いので、国際マーケットと接続している環境になっています。今、中国の農産物の、国内市場の価格と国際市場は連動しております。それから、2004年から農産物の貿易は黒字から赤字に変わりました。



このグラフは、三大産業の従業員の数と、そ

中国の国民経済と貿易の発展



資料：中国商務部対外貿易司

9

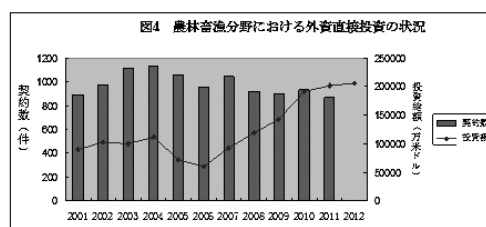
このグラフは、農産物輸出入の全体の状況を表しています。ここで見ると、ブルーの棒線は輸入、赤は輸出、黄色の線は貿易赤字となっています。ここで見て分かると思いますが、貿易赤字は次第に拡大しております。

2012年の農産物の輸入金額は1,125億ドル、輸出金額は633億ドルとなっておりますので、赤字は492億ドルとなっています。

もう一つは、海外の資本流入です。海外の直接投資は、中国の経済の発展における役割が非常に大きいです。前の世紀の1980年代から1990年代、日本の投資も、中国の経済発展における重要な役割となっております。

外資は、中国にとってはいい面もあれば、若干問題の面もあります。いい面で言うと、技術のスピルオーバーという効果もあります。もう一つは、国内の企業にとっては、刺激となって技術と品質の向上にもつながるということです。問題になっているのは、外資の進出によっては、中国の一部の産業や市場を独占するということにもなっています。

中国の国民経済と貿易の発展



資料：中経ネット統計データベース

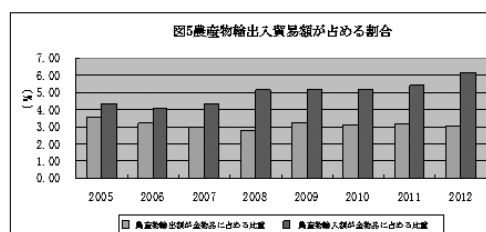
11

このグラフは、農林畜漁分野における外資直接投資の状況です。ここで見られるのが、まだ外資の投資はそんなに多くないのですが、昨年のデータでいうと、20億ドルの投資があります。全体で中国の外資投資の1.8%しかありません。

次に、中国農産物貿易における発展の特徴について見ていきたいと思ひます。

1つ目の特徴は、農産物貿易額が物品貿易全体に占める割合は、徐々に減少しています。

中国農産物貿易における発展の特徴



資料：中経ネット統計データベース

13

このグラフは、最近の7年間の状況です。輸出から見れば、若干、減少しています。去年は、全体の3%ぐらいを占めております。輸入は、昨年では6.1%を占めています。ただ、1990年代では、輸出は全体の25%も占めておりました。

ということは、中国農産物の貿易は、全体に占める割合はどんどん減少してきています。こ

これは全体の、世界の状況を見れば、一つの流れになっているかもしれないと思っております。

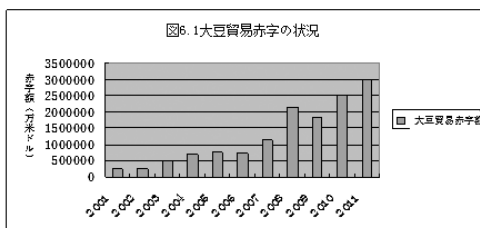
2つ目の特徴は、この貿易赤字は、もう常態化しているということです。2003年まで中国は、農産物は黒字がずっと続いた国でありました。2004年以降は、中国は貿易赤字の時代に入して、赤字の額はどんどん拡大しております。

先ほども言いましたが、最近の赤字を中国の土地面積で計算すると、実際、中国の輸入した農産物の占める割合は、国民の消耗する全体の農産物の10%にもなっています。

皆さんは、中国の食糧に関しては、これから輸入するのでしょうかという関心があると思います。確かに、食糧も昨年来、中国も輸入を始めました。ただし、全体と比べて、占める割合はまだ2%ぐらいしかありません。つまり、中国の食料自給率は、まだ98%であるということです。

貿易赤字の非常に大きいものは、大豆、綿花、肉、砂糖です。

中国農産物貿易における発展の特徴



資料：中経ネット統計データベース及び中国商務部対外貿易司

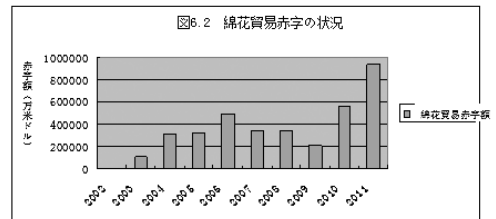
15

この図は、大豆の貿易赤字の状況であります。中国は昨年、輸入した大豆は5,800万トンです。これは、どういうことを意味しているかといいますと、世界全体の、大豆の輸入の割合でいうと、60%も占めています。

食用油関連の輸入からいいますと、去年は360億ドルを輸入しました。大豆以外に植物油

も直接輸入しているのですが、中国は昨年の数字から見ると、960万トンを入力しています。ということは、中国の植物油の自給率は60%しか、現在はないという状況です。

中国農産物貿易における発展の特徴



資料：中経ネット統計データベース及び中国商務部対外貿易司

16

もう一つの輸入の多い品目は、綿花です。この表は綿花の貿易赤字の状況を表しています。2012年は541万トンの綿花を輸入しました。金額換算で、米ドルで120億ドルです。ただし、中国の昨年の輸出した紡績関連商品では、3千億ドルの輸出となりました。ということは、綿花の輸入は油と違って、多くの部分は、実は輸出品の原材料という目的で輸入しています。

砂糖の貿易赤字の状況についても見ておきます。砂糖も同じように輸入は非常に増えています。砂糖は、消費量は大きくないので、金額からいうと、そんなに全体金額的には大きくありません。去年は22億ドルの輸入赤字です。

もう一つの赤字の部分について、ここには書いてありませんが、畜産品の輸入の赤字です。昨年では84億ドルの赤字となっております。日本では、よく中国産の商品が至る所にあり、実際に中国は、本当に輸入するものがあるのでしょうかと、皆さんはたぶんそういった疑問もあると思います。

中国は、実はこの輸出入の中で非常に多いのは果物、水産物、畜産物です。もちろんこういったところを日本にはたくさん輸出して、日本は

中国にとって非常に大きな市場ともなっています。

全体の貿易からいうと、中国は日本にとって最大の市場となっています。昨年、中国は日本から輸入した商品の金額は、1,700億ドルとなっています。逆に、日本市場向けに輸出したのが1,500億ドルという金額です。ということは、日本にとって中国との貿易では、約200億ドルの黒字となっております。

ただ、農産物に関しては、状況は逆かもしれません。ただし、金額の全体に占める割合からいうと、非常に微々たるものかもしれません。中国の貿易における、農産物の三大商品に関する金額は、全体としても220億ドルという金額になっています。

3つ目の特徴として、市場に依存する状況、いわゆるバランスを見ておきたいと思います。

言えるのは、輸入元は集中しているのですが、輸出先市場ではわりとバランスの取れた分散傾向にあるということです。

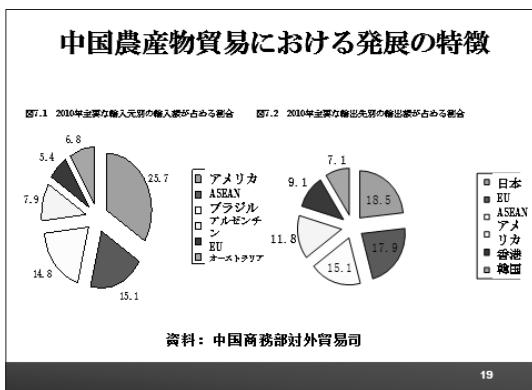


図7.1のグラフを見てほしいと思います。輸入元別の輸入額が占める割合です。

1番目は、やはりアメリカです。アメリカは中国にとっては最大の輸入元の国となっております。輸入品目で多いのは、大豆とトウモロコシです。

2番目は、ASEAN です。この10カ国は、中

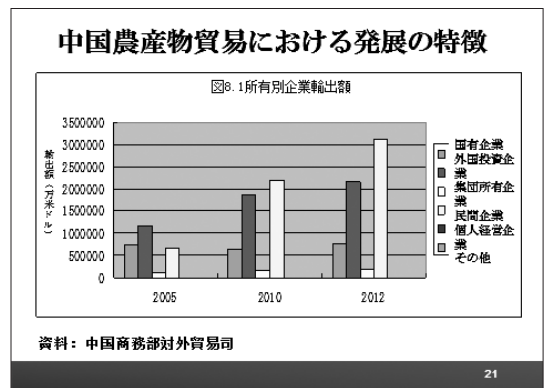
国にとっては2番目の市場です。輸入品目は、基本的には植物油です。

南米に関してはアメリカに似ていますが、輸入品目は、砂糖と植物油です。

図7.2は、輸出先別の輸出額が占める割合です。ここで見て分かるのは、日本は1番目の大きい市場であります。主には、果物と野菜です。2番目はEU、3番目はASEAN という順番になります。

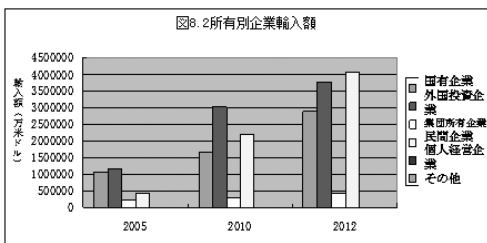
次は、農産物貿易に関わる企業別の状況について見ておきたいと思います。まず、見て分かるのは、外資企業の占める割合が少しずつ高くなってきています。それから、国有企業の割合は減少しておりますし、民間企業の成長は非常に目覚ましいということです。

例えば、中国から日本に輸出した野菜に関しては、実際の一部は日本の企業が中国で投資して、逆にまた日本に輸出するというパターンであります。



これは、所有別企業の輸出額を表したグラフです。これは輸出の金額です。ここで民間企業は1番で、次に外資企業となっています。

中国農産物貿易における発展の特徴



資料：中国商務部対外貿易司

22

次のグラフは、所有別企業の輸入額を表したものです。輸出と同じように、やはり外国企業、民間企業の占める割合が非常に大きいということです。

国有企業は、まだ輸入に関しては、割合的に大きく占めています。原因は、一部の品目に関しては国有企業が占める割合が、まだ大きいということです。

4つ目の特徴は、中国は非常に大きい国ですので、各地域の貿易に関する割合は、不均衡であるということです。

このグラフはもっと分かりやすいと思います。一番多いのは、やはりこの沿海地区ということで、いわゆる華東地区です。ここで分かるように、輸入、輸出のどちらにしても、非常に華東地区の占める割合は大きいです。次は、華北と中南という地域です。

以上が、現在、中国の農産物貿易における、4つの重要な特徴であると思います。

3点目は、中国農産物貿易におけるチャンスと挑戦という問題について、お話をさせていただきます。

中国全体の経済の発展については、世界においていろいろな議論があり、考え方があると思います。

2003年、10年前に、私がアメリカにいたころに、アメリカの学者から、経済原理から見れば、中国の産業における権利は、あまりにもはつき

りしないことが問題である。市場に関しても整合性がまだ低い。それから、中国政府に関しては独裁的であるというような評価があり、中国の経済が成長する理由は見つからないということを言われました。

ただし、中国経済は確実に成長しました。これはもう事実であります。最近、アメリカの学者たちは、もう一度、中国の経済に関して考え直さないといけないということを言われました。

現在のある経済理論で、中国の経済成長を解釈、説明するということは、非常に難しいとも言われました。これは10年前からも言われた問題ですが、中国は実際にこういった問題に関しては、全て解決したというところには至っておりません。

もう一つ、最近よく言われる問題に、いわゆる人口ボーナスは、中国に関してはもう終わるということです。さらに資源も非常に逼迫してきておりますので、中国においては、この先に成長はあるのでしょうかという議論です。

確かに、こういった心配があるように、われわれも中国の、今現在の経済成長のスピードが若干鈍化しているというのは事実だと思っています。2桁の成長から、現在では約8%の成長にスピードが緩くなっているということが起きています。これは、確かに外国の立場から見れば、中国の経済に関して、最大の関心事であると思います。

2011年の冬に、シカゴ大学である会合に参加しました。アメリカの学者に、中国の産業の権利関係はあまりはっきりしないという批判は、実は中国の文化に関して、あまりご理解がないということではないでしょうかと言いました。

実は、中国はどんな土地でもちゃんとオーナーがいて、しかも境界線はどこにあるかというのを、みんな知っています。ただ、境界があっても、実際、法律にのっとった文章、あるいは資料があまり持っていないというのがあるかもしれません。アメリカの文化と違って、アメリカ

人にとっては非常に理解しにくい部分かもしれませんが、中国にとっても、確かにこれはあまりいいことではないと思っています。ですので、農業においても、中国は多くのチャレンジ、挑戦があると思います。

時間の関係で、簡単に箇条書きで何点かご説明いたします。

一つは、農業分野の小型化です。つまり、農業におけるウェート、あるいは比重がどんどん小さくなるということです。これはもう経済が発展することによって起こる現象としては、よくあることだろうと思います。ただ、問題としては、農村の人口の減少と、それが労働力の減少につながっているということです。

もう一つは、農業資源がどんどん減少し、一人当たりの農業資源が限られることになるということです。だから、農産物の貿易を見るときに、消費人口において、一人当たりの消費量を見るということが、実際の見方だと思います。

輸入の数量、金額というのは、国内の生産と消費との関係が非常に密接にあると思います。

消費は、収入と生活レベル、それから消費モデルに、密接に関係していると思います。消費の発展、あるいは収入の増加に関しては、基本的には、もう増加となれば、それぞれの国が同じような傾向になってくるのが一般的であろうと。ですので、長期的に見れば、消費の趨勢が同じようになってくると思います。しかし、実際は地域別にかなりの違いが、現実的にはあります。

農産物の生産は、2つによって限られていますけれども、一つは資源と、もう一つは生産レベル、技術です。

国際的な交流、あるいは国と国の交流によっては、技術のレベルはだんだんと同じようになってくると思います。残りは、一人当たりの資源の部分だと思います。将来的にはアメリカ、オーストラリア、あるいは南米といった自然資源の豊富な地域は、自然的に国際農産物貿易におけ

る重要な輸出国、あるいは地域になってくると思います。

ですから、そういった視点から見れば、中国、あるいは韓国にしても、日本にしても、将来的に長期で見れば、農産物の純輸入国になる可能性が非常に大きいと思います。ですので、世界の農産物貿易の交渉に関しては、将来的にはこの日中韓の3カ国は同じような立場になってくると考えられます。

ただ、それぞれ3つの国の内部に関しては、それぞれの事情があって、必ずしも同じではないと思います。ただ、先ほども言いましたように、長期で見れば、世界的な舞台の中では同じような立場になってくると考えられます。

例えば、WTOの枠の中での交渉に関しても、東アジア以外においては、日中韓は緊密に連携して、ほかの地域との交渉においては同じような立場、同じような交渉のポイントを持つことができるのではないかなと思います。

最後に一言まとめますと、中国の農産物貿易に関しては、長期では純輸入国にまずなると考えられます。

ただし、中国の食料自給率に関しては、必ず自給自足を、自国で自給できるように、これを堅持したいと思います。なぜならば、どの国、あるいはどの地域も、この13億人、将来は16億人といわれる、この巨大な国の食料を提供する地域、あるいは国というのが存在しないということだと思っています。

もう時間が来ましたので、この辺で終わりにさせていただきますと思います。皆さんの質問、あるいはコメントを頂戴したいと思っています。よろしくお願いします。

(講演Ⅱ：終了)

○司会 どうもありがとうございました。

では、せっかくの機会ですので、ご質問がありましたらお願いいたします。

○会場1 シェシェ (謝謝)、どうもありがと

うございました。

私は、カネガイと申します。佐賀で百姓もしています。途中、時間になったので、はしょられた最後の、あまりしゃべられなかったところで、お尋ねしたいことが一つあります。

27と28辺りで、輸出入管理というキーワードがありましたけれども、そのところですよ。

今、日本では、いわゆる TPP の問題でもって、よく TPP の賛成論者の方は、農業問題に関して言いますと、日本の優れた、おいしい食品、商品をアジアの富裕の方たちに輸出することによって、もっと規模をいろいろ上げるという問題です。輸出を増やすということと、経営の規模拡大をよく言われて、農業のほうも一時、生産を強めるというようなことを言われます。非常に無理な話なのですが。

そのような中でちょっとお聞きしたいのが、今、私が知っている限りにおいては、大陸、中国において、日本のコメ、それから今回 TPP で2番目に問題となってくる畜産農家さん。そちらの関係で、コメと畜産物に関して、日本から中国大陆に輸出しようにも、今、デット（不可）となっていてできない。同じ大陸でも、香港には出せるのです、できないはずなのですが。そうですよねということと、もしできないのであれば、これはいずれか改善されていく方向もあるのでしょうか。

間違っていたら、すみません。教えてください。

○唐 ご質問をありがとうございました。

まず実績としては、日本米を輸入したことがあるということをおきたいと思います。今現在も少しですけども、毎年、日本米を輸入している実績はあります。政策的に日本米を禁止するということは、今現在なっていないということです。

輸入量が少ないのは、実を言うと、価格が非常に高いことに起因しています。中国の一般的な庶民は、日本のコメを消費するのは、実は非

常に難しいということです。

先ほども言いましたけれども、実は食糧に関しては、中国の輸入量はずっと増加してきています。去年は250万トンのコメを輸入しました。そのうち、日本からのコメがどれくらいあるかは、ちょっと正直、分かりませんが、少ないと思います。

おそらく日本のコメ農家は、これからは東南アジアのコメ農家との競争になると思います。また、アメリカ、カリフォルニア産のコメとの競争にもなると思いますし、中国の東北でもコメをつくっていますので、そこも競争になるのではないかなと思います。

正直、TPP に関して、農業分野において日本にとってはいいことはない、私も思います。なぜならば、われわれの貿易相手は、いずれも農業資源の巨大な資源を持っている国と地域です。牧場にしても、一つの牧場の規模から見ても、競争相手にとってもなれないという状況です。

ですので、競争に関しては、非常に難しい局面になると思います。こういった意味合い、角度から見れば、中国の農家と日本の農家は同じような立場になってくると思います。だから、アメリカやオーストラリアに対しては、同じような強気の交渉をこれからしていかなければいけない。

肉の輸入に関しても、中国は昨年、金額にして84.5億ドルの肉を輸入しました。私がいる、中国人民大学の近くのレストランで、実は日本の肉を食べることができます。私の記憶ではとても高く、ステーキを一つ頼んだら300元、日本円にしたい5千円以上したと思います。貿易政策も問題ですが、価格も非常に、実は競争においては重要な問題だと思います。

香港に関しては、実は香港の一人当たりの消費の平均金額は非常に高い、中国大陆と比べて高いということです。ですので、香港の市場に日本の農産物が入るのは、もっとスムーズになると思います。

ただ、香港の人口は700万人しかありませんので、キャパシティーから言うに限られていると思います。ただ、一国の農場にとっては、香港の市場は大きいと思います。ですので、狙いとしては、ぜひつくられている農産物を順調に海外に輸出できるように願っております。

将来、北京でもおたくの農産物を購入、あるいは食べることができることを楽しみにしております。

○会場1 ありがとうございます。シェシェ（謝謝）。

○司会 では、あともう一人・・・。

○会場2 いいですか。

フジノと申します。今日は、時系列的に貿易のデータをお示ししていただきまして、ありがとうございました。

まったく観点は違うのですが、日本人は今、水を買っているんですね。水道水があるのですが、買っているのです。高い水があるのです。その原因は、一つは空気汚染です、水の汚染ですね。土壌汚染、ひいては心の汚染ですね。そのようなことが起きている時代を日本は迎えています。

新聞やマスコミで、中国の空気の問題とか、水の問題とか、土壌の問題が起きていますけれども、現実はどうなのでしょう。安心して国民が食べられる農産物をつくっているのでしょうか。その辺をちょっとお尋ねしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○唐 質問をありがとうございました。

汚染問題に関しては、農業等は関連のある問題だと思うのですが、ただ、私の研究とは直接関連するものは少ないと思います。

ですので、答えとしては、専門家の答えにならないと思いますが、言えるのは、汚染は誰も好きではありません。中国人も同じです。北京にいと、毎日、皆さんが文句を言っているのは空気の汚染問題です。こういった汚染が日本に及ぶのは、われわれも望んでいません。

ただし、世界の歴史を見てみますと、いつも現在の人たちは賢いと。先祖の過ちを避けることができる、自信を持ってやっているのですが、ただし、そういう間違いの繰り返しは、実はもう何回も何回もやっているということです。

アメリカ人が書いた『沈黙の春』という小説があります。これは、アメリカの工業化による汚染問題について書かれた書物です。もっと前に、有名な書物で『オリバー・ツイスト』という、ロンドンの汚染の状況を書かれた本があります。非常に不幸なことに、実は中国も同じようなことに今なっています。

まず見てほしいのは、実は、中国は今、率先して汚染問題について取り組みをやっております。なぜならば、一番汚染に直接、先に影響を受けているのが中国人です。

私の願いとしては、早くこの汚染問題を直して、日本へのマイナス影響が減少することを願っています。

それから、お願いとしては、日本からぜひ助けを、あるいは技術的な助けをいただきたいと願っています。

私は、個人的に1995年から1996年に、オランダに1年間住んだことがあります。その当時、オランダの運河の、ライン川の汚染の問題を議論されておりました。

ドイツはライン川の上流にあります。オランダは下流にあります。オランダ人はドイツ人に、ぜひ汚染を直してほしいと言っていました。ドイツ人は、それは問題ない。ただ、お金を出してくださいと。オランダ人が言ったのは、お金を出すのはいいのですが、ただ信用はできない。お金を出しても直してくれないと困りますと。ですので、われわれお金はフランスの銀行に預けます。本当に治水ができれば、このお金は後で払いますと。

こういった汚染の問題に関しては、実は国内と国外の議論は、ちょうど逆になると思います。国内では、汚染をつくった人にはペナルティー

としてお金を払ってもらうことになりますが、国家間では、実は汚染を受けた側にも、理不尽ですけどもお金を払ってもらうことになっています。

これは、経済原理からいうと、産権管理です。所有と権利がはっきりしないことに起因しているかもしれないですね。汚染する権利、それと

も汚染されない権利、こういった厳密な区切りができないから、問題になっているのです。

ですから、政府間の交渉と協力が必要だと思います。日中間、2国間でいい解決の方法を見つけることを願っています。

ありがとうございました。

(講演 2 終了)